幼児の教育　第94巻　第８号　平成７年８月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995

8

お茶の水女子大学
平成
7. 9. 27
附属図書館

第94巻　第８号　日本幼稚園協会

これがあれば、もうだいじょうぶ。

楽しい運動会はこの5冊で。

リズム保育12か月
―手あそび・ゲーム・オペレッター

鈴木みゆき　編著

CD5巻・解説書（B5判）　定価12,500円(本体12,136円)

4月から月毎に1年間、行事を中心に月案、展開の仕方、音楽を収録。手あそびからオペレッタまで104曲を編集したCD5巻、解説書のセットの保育資料。

①One Two 手あそび編

阿部直美　著

CD1巻・解説書（B5判）　定価4,000円(本体3,883円)

練習しなくても簡単にあそべる作品集で、長年保育現場で人気のある曲を収録。あそびの中から自然にリズム感や表現力を育てることができる。

②みんなでたいそう Go! Go! Go!

阿部直美　著

CD1巻・解説書（B5判）　定価4,000円(本体3,883円)

日常保育や運動会にすぐ使える表現あそび曲を集めたもので、ストーリー性をもたせたリズムあそびの作品や体で表現する体操あそびを中心に構成。

人間関係がひろがる　うんどうかい種目集

阿部直美・浅野ななみ　共著

B5変型判120頁　定価2,100円(本体2,039円)

乳児から5歳児までの年齢別のあそびの種目を紹介、親子ゲーム・父母や祖父母のゲームなど参加者全員が楽しむ運動会用種目集。

人間関係をつくる　ゲームと遊び

浅野ななみ　著

B5変型判120頁　定価2,100円(本体2,039円)

スキンシップを深めるためのあそび、みんなと一緒に体を動かすリズミカルなあそび、ゲーム性を好む子どもにはルールのあるあそびなど年齢別に分類されている。

キンダーブックの
フレーベル館

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部
(03)3293-7793(代)にお問い合わせください。

幼児の教育

第94巻　第8号

幼児の教育　目次

——第九十四巻　第八号——

子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉『キンダーブック』のこと……森下はるみ…（6）

スペインに旅して　～OMEP世界大会の直前～……津守　真…（8）

トポスにおける発達　第3回　身体から意味へ……無藤　隆…（14）

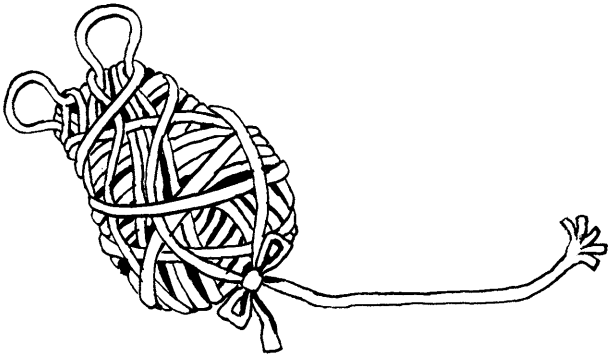
園長室の窓から(3)　保育環境について考える(2)……原口　純子…（21）

特集〈緑蔭図書紹介〉

阪神大震災と大江健三郎講演「癒される者」……中村　弓子…（28）

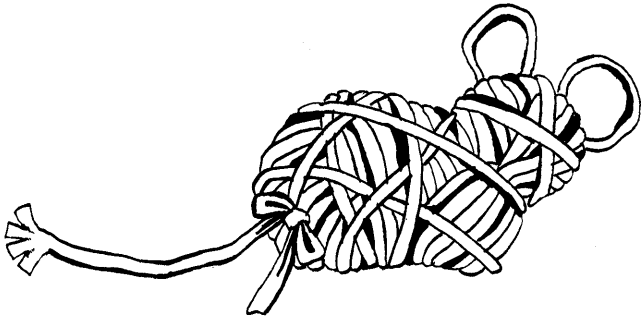
『ナルニア国ものがたり』全七巻……森上　史朗…（31）

© 1995
日本幼稚園協会



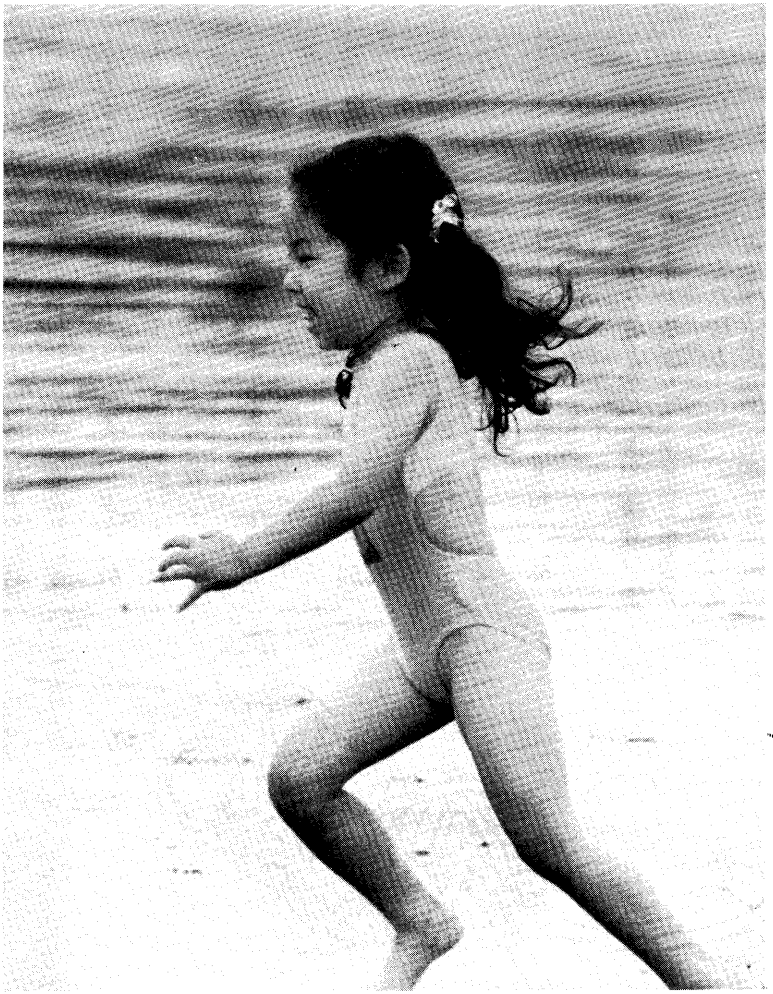
『心に残る言葉』　Words to Remember……村田　修子…（34）
アダンの木陰に残光を観る　『田中一村作品集』……本田　和子…（38）
子どもがすすめる本……湯沢　朱実…（41）
『動物行動学入門』他……水野　悌一…（44）
子どもたちへのまなざし(14)　聴いてもらう体験……松井　とし…（48）
親子発達とノート法……岡村　佳子…（50）
ある日の育児日記から(56)……佐藤　和代…（57）
子どもと共にいて……斎藤　美和…（58）

表紙・松永　潤二／扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ
編集委員・田代　和美／本田　和子
桝田　正子・伊集院理子
編集部・大沢　啓子・仲　明子



子供讃歌

海辺で遊ぶ



撮影・平野　清

〈巻頭言〉

『キンダーブック』のこと

森下　はるみ

幼児の頃の絵本といえば『キンダーブック』であった。横長の本にいつも二つ折りにくせがついていたので、和歌山の南端近い小さな町まで、はるばる郵送されてきたものにちがいない。六〇年も前のことなので、確かめようにも父も母もすでにない。

〝この女の子　きらいや　Fやんに似てるもん〟と本をめくりながら姉がいう。妹たちもそれに同調して、新しい絵本の女の子をくさすのが常であった。Fさんとは、近所の父子家庭の姉のほうで、母親がいない分、子どもながら炊事や洗濯をよくやっていた。父親が、近所の頼まれ仕事や百姓の手伝いを不定期にひきうけることで生活していたが、その無口な男が、時々、爆発的に子どもを折檻するのである。子どもたちが裸足で逃げながら泣き叫び、父親の怒鳴り声と子どもの泣き声が通りにもひびきわたる。そんなFさんの貧しさ、突如あらわれる恐ろしい修羅場、それなのに次の日には何もなかったかのようにふるまっている不可解さが、子ども心にFさんというより、Fさんの環境に拒否感をもたせたのだろうか。

故郷の家を処分したとき、三日ばかり、いろいろな物を燃やしつづけた。そのなかに、あの頃の『キンダーブック』もあった。けむりにむせながら、ページをめくっていると、顔のところを、鉛筆で無残によごされたあの女の子の絵があらわれたのである。星空のような美しい幻想のなかに浮かぶ、細い釣り目の女の子、明るい花の中から顔をだすほっそりした女の子、そして作者の名は、いつも〈はつやま　しげる〉。

突如思いついた。わたくしたち姉妹は、この美しい幻想の世界に、こともあろうにヒロインとして招かれたFさんに、嫉妬していたのではなかろうかと。わたくしたちが嫌ったのは、単にFさんの恵まれない環境への拒否だけではなかったのではないかと。

その後、大人になって大阪にでた彼女は、まだ若いうちに、やはり不遇のまま亡くなったときいている。そして今では、あの故郷の「通り」に住んでいた人々の大半は退場していった。三つ子の魂にまず最初に登場したのが、残酷さ、拒否感、嫉妬心などのちみもうりょうであったこと、「シンデレラ物語」のいじわる姉妹の役をやっていたことを、はからずもふるい『キンダーブック』が思いださせてくれた。しかし、この種の幼児的残酷さは、普通は次第に修正されたり抑制されたりする。〝悪人ゆえに救われる〟という仏教の教えは、幼児教育にも共通するものであろう。

今ではFさんも〈はつやま　しげる〉のえがく幻想の世界のなかに安住し、わたくしの子ども時代と共にいる。

（お茶の水女子大学）

スペインに旅して

～ＯＭＥＰ世界大会の直前～

津守　真

四月八日から一週間、ＯＭＥＰ世界常任委員会が、スペイン、ソリア郊外のアルマルザで行われた。マドリードから更に二百五十キロ北東にバスで四時間ほど行った所にある。私は、今年の八月一日～四日に横浜で開かれる第二十一回ＯＭＥＰ世界大会の中間報告をするために、妻と一緒に出かけた。

バスが北に進むにつれ、岩山の丘陵がつづき、丘の中腹に教会の塔を中心に赤い屋根の村落が見える。北に行くにつれ、人家もまばらになる。その殆ど廃村に近い村で、マドリード市内の私立学校が、昔は城主の館だった石造りの三階建の家を修復して、子ども達が交代に毎年一週間を田舎で過ごすための寮にしている。学園長のホセフィーナ・ウントウルベ女史が、今回のＯＭＥＰ世界常任委員会の会場にここを提供されたのである。何百

年も昔の家具調度がそのまま使われており、門を一歩入っただけで、中世に生きているような気になる。ここでの客の接待の仕方も極めて古典的で、毎回の食事には、正式のウェイトレスが二人、姿勢を正して無言で給仕するという具合で、最高のもてなしをしようとされる主人の心意気を感じさせられた。子ども達もここで昔ながらの文化の中の生活を学ぶのであろう。反面、ボートやサイクリング用の自転車が沢山用意されていて、現代の都会の子ども達にとっては貴重な体験の場になっていることが察せられた。

マドリード空港で、集まってくる人達を待ちながら、私は久しぶりに会った世界常任委員の人達と話していたとき、英国の人が娘の家族の写真を見せてくれた。若い両親と三人の可愛い子ども達が肩を組んで写っている。一人の子どもは前の夫の子ども、一人は夫の前の妻の子ども、他の一人は自分達の子どもだと説明してくれた。私がその意味をすぐには理解しかねていると、隣に座ったノールウェーの人が、これが今のヨーロッパの典型的な家族だと説明してくれた。私は、日本ではこれほどまでに離婚が一般的だろうかという疑問とともに、祖母が息子娘達のこういう家族関係を人の前であからさまに話すことに驚いた。また、片親が違う子ども達がはばかる事なく始終一緒に集まる開放的な関係にあることをあらためて知った。私達の世代の者には受け入れがたく感じるが、これが現実なのだから受け入れるよりほかないだろうとその人は話された。いつものことながら、私は外国に出かけるたびに思いがけないことに出会って、自分にはそうはできないと思いながら、普段の常識をもう一度考え直させられる。

ＯＭＥＰ世界大会は、開催国の責任で行われるが、三年に一度開かれ、世界常任委員会と連絡しながら準備することになっている。創設以来の精神を引き継ぐこともまた重要な課題である。ＯＭＥＰは、子どもの生活の充実のために働く保育実践者の集まりであること、国境を越え、政治信条、宗教の別を超えて協力する場であること、子どもの仕事を通じて世界の平和に寄与することなどである。

世界常任委員会で、私は最初に、阪神大震災のために募金が予期したようには進捗せず、一時は、休憩時間のコーヒーも出せないかと思ったと話すと、コーヒーはなくてよい、お湯があればよい、世界の保育者が一堂に集まることに意義があるのだからと、皆が一斉に声をあげたのには驚いた。幸いに、コーヒーを提供して下さる会社があり、コーヒーブレークも通常のようにすることができるが、世界ＯＭＥＰの幹部の人達は、日本での世界大会を成功させようと一生懸命である。その中でも、こういうことはＯＭＥＰの精神にはそぐわないから譲歩すべきでないというような意見が挿しはさまれて、私は襟を正してもう一度考え直したことも何度かあった。随分遠慮なく皆が意見を述べるが、その終わりにはかならず、決めるのはあなたと日本委員会なのだからと付け加えられる。

世界各地域で活躍している人を幅広く知っているのは、世界ＯＭＥＰの人達なので、シンポジウムのスピーカーもその人達の力をかりて企画し、人選してもらっている。夜のコーヒーの時間は、そんなことについて自由に話し、意見の交換をするのに最適である。スペインでは、二時頃に昼食を終わると、四時半頃まで昼寝の時間（シエスタ）をとる習

慣がある。会議でも同様で、夕方の六時半頃から小さな見学や旅行があって、夕食は八時半、ときには九時である。夜のコーヒーの時間は、最初の二日ほどは活発だったが、週の後半には私どももヨーロッパの他の地域の人達も常とは違うこの生活時間帯に疲れてしまった。世界大会にはスペイン語圏からかなりの数の人達が日本に来るのを楽しみにして来られる。スペインの人は、私ども日本人と同様に、英語が拙い人が多いが、他人に対する興味がつよく、何とかして心を通じさせようと一生懸命になる人が多い。言葉でコミュニケーションできなくとも、子どもの仕事をしている人は、表情や身体表現を通して互いに理解しあえる共通性があることを信じてよい。

今度、日本の世界大会に集まる人達は、アジア、アフリカ、南北アメリカ、ヨーロッパと世界各地にわたっているが、多くが日本に初めて来る人達である。

いま、世界大会の準備も最終段階に達して、世界各地から―ロシア、東欧、ネパール、ベトナム、中国、マダガスカル、などなど多様である―、財政援助の要請、廉価なホテルの斡旋、ビザのための公式文書請求などの問い合わせが毎日のように来ている。円高の日本に来るのに、それぞれに苦労しながら、何とかして日本の世界大会に来ようとしている。その人達が、日本に来て良い体験をして帰ってほしい。どこの国でも、経済的に貧しくとも、住宅は広くて生活にゆとりがある。数日とはいえ、日本の安いホテルの生活がどういう体験になるだろうかということまで心配してしまう。

私どもがスペインにいるとき、テレビではオウムのニュースが報じられていた。マスコミの力は大きいが、新聞のニュースがすべてではなく、どこの国にも子どものために一生懸命になって日々の仕事をしている人達がいることを、直接に知ってもらいたい。また、私どもも外国のことを、新聞のニュースからはなれて、直接に話を聞くことによって認識し直したい。

スペインのＯＭＥＰ世界常任委員会で、ひとつ嬉しかったことがある。それは世界大会の開催国で幼児教育に貢献した人を名誉会員に推挙することがならわしになっており、日本の荘司雅子先生がそれに選ばれたことである。先生が常に平和教育を主唱されていたことは世界の人達にも記憶されており、今回の推挙となったものと思う。荘司先生は日本保育学会の大長老であり、ＯＭＥＰ日本委員会会長をつとめられ、現在は日本委員会名誉会長で、いまなお幼児保育のために著作活動をなされていることは日本の人々にはよく知られたことである。世界大会の四日目に行われる総会の席でＯＭＥＰ名誉会員への推挙がアナウンスされる。

それから、スペインに行く直前に、この二月に亡くなられた故神沢良輔先生のご遺族から、先生が生前心にかけておられたＯＭＥＰ世界大会に、記念として多額のご寄付を頂いた。私は長年にわたり、先生とはご親交を頂いていたので、世界大会を待たずに先生が亡くなられたことを残念に思うと共に、このことを有り難く思った。

スペインでの一日、バスで近くのプエブロ（村）を通ったとき、古い教会の塔の上に、コウノトリが大きな巣を作っているのを見た。鶴のように足の長い大きな鳥が出入りしていた。昔からヨーロッパではコウノトリが赤ん坊を窓から運んで来るという言い伝えがある。子ども達はそう信じているという。教会の前の小さな居酒屋のテーブルに腰をおろしてそれを目の前に眺めながら、もうじき始まる世界大会のことを思った。

（愛育養護学校）

※七月号（P.45）で報告しました基調講演者、パウロ・フレイレ氏は、都合により来日できなくなりました。

トポスにおける発達

第 3 回

－身体から意味へ－

無藤　隆

トポス（場所）の最小限の成り立ちを考えたとき、それは我々の体とその動き、そしてその動きに直接に関与する周りの事物を含み込むだろう。今回は、その成り立ちを、意味の発生という観点から考えてみたい。体を動かすこと、その動きに意味の最も基本的なあり方をとらえる。その原型とはどんなものでありうるのか。

体の動きの原型とは、体の動きの持ついくつかの基本、そしてその動きが周りの物と噛み合うあり方の形である。小さい子どもであっても、いや小さい子どもであるからこそ、その原型的な動きそのものがその生き方の中心をなすはずである。言葉とその意味内容を介しての「弁論」的な影響は弱く、自分の体と共に周りの環境に関わることが中心になる時期だからこそ、体の動きから汲み取るものが大きな意味を持つ。保育とは、そのような子どもを相手にする行為なのである。保育にあっては、体の関わりにいかなる意味を汲み取るかが問題である。

体とは、自分が常にそこにあるものである。自我が体のさらに中にあって、体とは別なものとして経験されることもあるが、多くの場合には、体は自分と重なって存在している。ときに、自分とは、体と体の関わる対象の双方を共に動くものとして含み込んで感じられる。自分をそして心を体と別物にしてとらえるべきではない。別に思えることもあるが、そうでないときもあり、そうでないときのあり方から「意味」が発生すると見なせるのである。なぜならば、意味とはこの世界に対する了解だからであり、世界への関わりから生まれるものだからである。少なくとも小さい子どもでの問題とは、心と体とがまさに重なりあい、世界との関係を取り結ぶところ、もっと正確に言えば、世界との関係から心と体とが析出されてくるところの過程にこそあるのである。

例えば、一歳半の子どもが道ばたを歩いている。道の端のちょっと高いところを歩いて、うまくバランスを取って歩く。そこから、わずか数センチの段差ではあるが、腰を屈めて、道に飛び降りる。そこに、もののバランス感覚とか、高いところに対して低いところを対比して、下へと急激に動くといった動きが見られる。同様のことは、幼稚園での保育室で子どもが巧技台を組み立て、そこで「ドンジャン」をしている光景でも見られる。同じようにバランスを取って歩き、飛び降りたりする。年齢が上がった分、段差が増しているだけでなくて、台の上を走ったり、物を持ったり、他の子と一緒になったり、片足で立ったり、その上で飛び跳ねたりするのである。同じバランスと言っても、複雑さが増し、周りとの関係も多様になっている。単にその上を歩くために、体重を重心から振れないようにするだけのことではなく、ダイナミックにバランスを取ることへと向かっていることが見て取れる。

このような動きの広がりと深化は、幼児の行動の到るところで見られる。トポスの問題として見たときには、この動きの意味の解析は二重に場所の問題

として現れる。一つは、身体が一つのトポスだということである。体自体の探索はもちろんその体を対象として興味を持ち、いじったり、調べたりするということもある。だが、それは体全体にとってのごく一部のことに過ぎない。もっと重要なことは、ここで述べている体の動きとそこから得られる感覚にある。体というトポスは、この世界に位置づき、この世界の中で動き回るものであり、その動きから絶えず体としてのまとまりを感じ取るところに成立する。

もう一つの場所の問題は、体というトポスが身近な環境としてのトポスに関わるところから生まれる。体がどのような動きを周りに対して行うかに応じて、逆に、周りの環境はどのような動きを体に対して可能性として用意するかが決まってくる。身近な環境とは、この観点から言えば、体の動きの豊かな意味を引き出すためのあり方なのである。バランスの様々な可能性を実現しやすい場所の特性とは何かが問われることになる。庭や保育室や遊具の特性がそこから定められるはずである。

では、その体の動きの原型的意味とは何であるのか。イメージ図式という考えに学びつつ考えたい。

イメージ図式とは何か

動きの原型を考える上で、興味深い示唆を与えてくれるのが、「認知意味論」を提案したジョンソンの議論である（認知意味論とは、アメリカの言語学

者のレイコフと、このジョンソンが提議したものである)。ジョンソンは、その著書『心の中の身体』(菅野盾樹・中村雅之訳、紀伊國屋書店)において、心と体と言葉の意味の根底的な同一性を主張して、次のように述べている。言語学のやや面倒な議論に立ち入らざるを得ないが、保育の問題に対しても極めて示唆的であるので、やや立ち入った紹介をしたい。

「身体の運動、対象の操作、そして知覚的相互作用には、繰り返し現れる型が伴うのであって、こうした型がなければ、われわれの経験は混沌とした不可解なものになってしまうだろう。これらのパターンを、私は『イメージ図式』と呼ぶ。なぜなら、それらは主としてイメージの抽象的構造として機能するからだ。それらは、それぞれの部分が関係し合い、統合的全体に組織されたゲシュタルト構造をもっている。……それをもっと抽象的な認知の水準で、意味がその周辺で組織されるような構造へと広げることができるのである。この比喩的拡張と洗練は、一般に、物理的身体が相互作用を行う領域からいわゆる理性的過程(たとえば、反省することや前提から推論を導くこと)への隠喩的投射という形をとる」(P.26)。

要するにこうだ。意味の根本は、後で引用するように、バランスを取るとか、入れ物とその出し入れといった動きの図式にある。その動きは具体的イメージそのものではなく、抽象的な図式である。この図式は、比喩的に思考の過程で用いられ、例えば、「物事のバランスを取る」とか、「情報の出入り」といった分析の形を取るようになるのである。その媒介をする働きこそが想像力と呼ばれるものなのである。

心と身体を厳格に二分し、感性と理性・悟性を二分し、相互に無関係なものとしたり、別々にあるものが後で総合されるとする(西洋の哲学において)伝統的なとらえ方から脱しなければならない。

「概念はわれわれの悟性の所産である。それは形式的で、自発的で、規則に支配されている。それに対して、感覚は身体に属し、われわれの感性により与えられ、実質的・受動的で、組み合わせや総合といった能動的な原理をまったく欠いている」（P.40）というとらえ方ではなく、「身体を心に返すこと」が必要だとジョンソンは主張する。その核にあるのが、イメージ図式であり、それを様々な具体的、また抽象的な事態に適用するのが想像力である。

物理的包含

含み含まれるという関係は、イメージ図式の代表としてよく検討されている。「包含と限界との出会いは、われわれの身体経験に深く浸透した一つの特徴である。自分の身体が三次元の容器（container）――ある種の事物（食物、水、空気）がここに取り込まれ、別の事物（食物や水の排泄物、空気、血液、など）がここから出てゆく容器――であることを、われわれは身近に知っている。われわれは最初から、環境（われわれを包むもの）のなかで物理的包含をたえず経験する。部屋、衣服、乗り物、そして限界で画された数々の空間を出たり入ったりしている。対象を操作して容器（コップ、箱、缶、袋、など）に入れる。こうした各事例には、反復可能な空間的・時間的組織がある。換言すれば、物理的包含の典型的図式である」（P.88）。

この包含の経験、つまり内と外の対比の経験から、次の五つの帰結が出てくると言う（P.89）。

(1)外からの防護や抵抗。例えば、眼鏡のケース。
(2)内部に力を制限し限定する。部屋の中にいると、力いっぱい運動することに制限が加えられる。
(3)包含された対象が位置を相対的に制限される。金魚鉢の中の金魚や、手でつかんだコップ。
(4)容器が対象を隠したり、逆に観察しやすくする。対象が見えやすくなったり、見えなくなったりする。
(5)包含の推移性が経験される。私がベッドにいてベッドが部屋の中にあれば、私は部屋の中にいる。

このように、繰り返されるパターンが比較的少数の形に集約され、その形はイメージ的であり、しかもその図式が様々な含意を生みだし、推論の方向を定める。このイメージ図式は具体的イメージそのものではない。その多くを集約して抽象化された一般性を持つものである。だから、様々な事態に適用できる。だが、言語化が容易なものでもない。言語で記述できるのはあくまでその一面に過ぎず、身体的動きに根を下ろしたその本質は、その動きの際の実感にこそあるのである。

このイメージ図式は、われわれがこの世界に関わり、この世界に位置づくこと、つまり理解ということを構成する基となるのである。もう一つ大事なことは、具体的な言葉として、その理解がいわば結晶化されるということである（だから、言語学者が注目するのである）。実際、ジョンソンの分析に従えば、内（in）と外（out）の意味にはすべて、物理的存在者や出来事ないし抽象的存在者や出来事の間に関係を打ち立てる活動を必要とする。例えば、深い眠りから（out）覚め、寝具の中から（out）出て、ローブを（into）急いで着て、手足を伸ばし（out）、ぼうっとしたまま（in a daze）、鏡を覗き込む（in）。はっきりと目が覚めると、新聞に（in）読みふけり、会話に（in）加わる。……

大事なことは、「外への方向づけの感覚（意義）は、われわれ自身の身体的方向づけの経験にごく密

接に結びついている」（P.108）ということだ。「内―外の方向づけの感覚を、われわれの多数の身体運動、操作、経験を通じて発達せしめているように思える」のである。「たとえば、練り歯磨きを絞り出すことには、内―外の方向づけをチューブとその内容物に投射することが伴う。ここには、私の身体とのかかわりで対象を方向付けている原型との類比がある。……すなわち、内―外の図式ははじめにわれわれの身体経験、つまりわれわれの知覚と運動の中に創発するのである」（P.108）。体の動きで経験される原型的図式から発して、それが他の物理的社会的、さらには精神的動きに当てはめられ、世界との関わりを豊かにまた理解可能なものとしていくのである。

バランスを取るといったことにも同様のことが言える。バランスとはまさに自らの体を使って学ぶ活動だからである。そのバランスは、例えば、「バランスを失っている」と感じるといった、心理的な苦痛の経験にも適用されていく。両手に等しい荷物を持っているといったバランスの図式は、理論の公平さといったところに広げられるだろう。

新たな客観性へ

イメージ図式といった考えは行為者のまさに動作し、活動するときの実感に基づいたものである。その意味で極めて主観的なものだ。しかし、その分析が他者に了解され、吟味されるという意味での客観性もまた備えている。誰もが経験することだからであり、体の動きや言葉の意味として分析可能だからである。

トポスという観点から保育を分析するという本稿での主題から言っても、重要な考え方とそしてまた分析の方法を提供してくれるものだと考える。

（お茶の水女子大学）

◇◇◇◇◇ 園長室の窓から(3) ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

保育環境について考える(2)

原口　純子

〈保育環境の複合性〉

先の号で、保育室の室内環境の貧弱さについて述べ、具体的な幾つかのおもちゃについて述べてみましたが、物があれば幼児は遊べるかというと、無いよりはあるほうが良いのですが、そう単純なものでもないのです。

幼児が充実した経験をするためには、環境が、物(遊具の選定)、園の教師の人間関係、幼児の人間関係、教師の意欲や適性、園の建物の構造、その他もろもろの物が複雑に入り組んでいる複合的な、あるいは総合的ものなのです。

幼児が物を使って遊ぶということについて、新しい遊具を出し、それがどのように定着したかを一輪車（ユニサイクル）の事例を通して考えてみます。

〈一輪車が育つ環境〉

近くに児童館があり、ホールに一輪車が備え付けられています。そこで、小学生と一緒になって幼児

▲児童館のホールで、一輪車で遊ぶ

数名が一生懸命練習している様子を見て、一輪車が幼児にも十分楽しめる遊びであることを知りました。

そこで、異動した新しい幼稚園で三台購入して、年長五歳児の部屋の前のホールに出してみました。担任の先生には「五歳で練習すれば乗れるようになるので遊んでみて欲しい」と伝えたのですが、担任の先生は興味が持てず、ほとんどかかわりませんでした。幼児もホールに置いてある一輪車にさわったり、練習する様子も見られませんでした。そのうち蹴っ飛ばされていたり、サドルがこわれたりして、保育室の倉庫に片付けられてしまいました。

次の年は教諭の異動があり、新しく来た先生が倉庫の一輪車を見付け、「私は一輪車は乗れませんので、児童館に練習に行かせて下さい」と言って、降園後、他の年長の先生二人をさそって出かけ、大人用の一輪車で練習してきました。もちろん、とうてい乗れるようにはなりませんでしたが、雰囲気だけはつかめたようです。翌日保育室の前のホールに一輪車を出して股がっていると、幼児の人だかりがして、「私もしたい」とか、「貸して貸して」とよってきて、近くについている、手すりにすがりついて練習を始めました。職員室がそばにあるため、職員が出入りする度に、目をかけ声をかけて励ましたり、

手伝ったりしているうちに、夏休み前に四人程の女児が何とか乗れるようになりました。他にも数名の幼児が代わりあって練習をして、夏休み中に家庭で買ってもらって練習した幼児も加えて、秋には二〇名位の幼児が乗れるようになりました。運動会の表現の中に取り入れ父母に見てもらいました。

この事例から環境ということについて幾つかのことがわかりました。

1　教具、教材、備品の選択

どのような備品や教材、教具を備えるか、と言うことは、どのような遊びや経験を持たせたいか、と言うことです。それは、園長でも教諭でも保育に当たる者が、保育のイメージやビジョンを持つことであり、その実現のために広く様々な情報をつかむことは大切なことです。

新聞、本、雑誌、論文、保育学会、教材カタログ、その他のカタログ、テレビ、講演会、公開講座、演劇、音楽会、語りの同好会、保育について話しあえる友人、デパートのディスプレー、小学校低学年の教育課程、児童館の子どもの遊び、子どもバレエ教室の発表会に至るまで、あらゆる情報をアンテナを高くしてキャッチし保育の場に生かせるヒントを蓄えることが、幼児の生活環境を豊かにし、可能性を広げる意味でも大切です。特に園長は園舎の工事予算や備品購入を司るのであれば、なおさら園をどうしたいのか、幼児にどのような経験を持たせたいのかのビジョンを描けることは大切なことだと思います。

さて、この事例では一輪車を出してみました。もちろん、幼児が一輪車に是非とも乗れなければならないものではありません。けれども、ちょっと努力するとできるようになるものは幼児の意欲を高め、自信や成就感をもたらします。できないからといって劣等感を持つというほどのものでもありません。一輪車自体は年長の幼児に適した遊びだったと思い

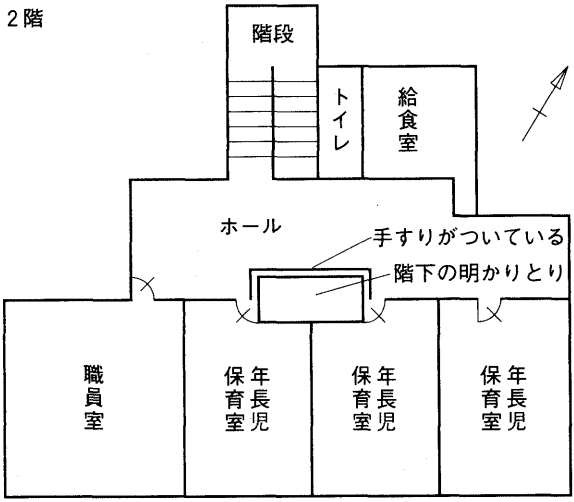
ます。

2　職場のチームワークと先生の意欲

園長がどんなに張り切って設備や施設を整えても、クラスを持つ先生や主任と園長の気持ちがよく通じ、人間関係がうまくいってなければ、素晴らしい方針も、良い備品も幼児の目の前にあってすら役に立たないことがわかります。公立の幼稚園は異動が激しく、前任の園長で安定していたところに、異動で新しい園長を迎えると、大体一年間は何もできないのです。信頼関係が育っていないところで、新しい園長が一輪車などを買ったので、一斉に「できるわけないわよ」という否定的な、反発する気持ちになったのかもしれません。新しい物を入れる時期を見誤ったともいえます。一輪車三台はしばらくホールに出してあったのですが、結局その年は役に立ちませんでした。園内の人間関係がどんなに大切な「保育環境」であるかがわかります。

次の年、主任や教諭の大幅な入れ替えがあって、新しい体制になりました。この年は大きな研究会を控えた年でしたが、主任の先生を中心に大変まとまりの良い年でした。年長担任のM先生は小さな事にこだわらず前向きで、意欲いっぱいの先生です。一輪車を見付けて、乗ったことはないけれども幼児に出す前に自分でやってみようと思ったようです。この教師の意欲が幼児を引きつけています。教師はとても大切な環境です。小さな一輪車に股がって、手すりにしがみついているM先生のまわりに幼児がいっぱいむらがって「なにしてるの」「つぎ貸して」と大さわぎ、幼児に貸し与えて、手をとってやったり、車が逃げないようにおさえたりしているうちに、幼児は意欲をかきたてられたようです。

教師の資質にはいろいろあり、みなそれぞれの良さを持っているのですが、幼児教育に携わる者として、好奇心のある、意欲に満ち溢れた先生の存在こそ、なににも増して、大切な保育環境です。



◀園舎見とり図

ともあれ、M先生の出現で、捨てられそうになった一輪車も命を与えられ、これのために早く登園したがるという幼児の話を父母から聞きました。

3　一輪車によい構造的環境

物があって意欲的な教師がいれば幼児はよい経験が持てるかと言えば必ずしもそれだけではないようです。それぞれの遊びにはその遊びに適した構造的環境があります。例えば、同じ砂場でも水道がそばにある場合とはるか離れてある場合とでは幼児の遊びも経験する内容も違ってきます。

さて、一輪車に適した園舎の構造とは何でしょうか。本園の場合、一輪車を固定する壁と、つかまる手すりがあったこと、その高さと長さがちょうど良い具合でしたので、人手を煩わすことなく自分で取り組めたことでした。また、三台の一輪車が動き回って危険のない広さがあり、友だち同士一緒にする楽しさや、競争意識を持つにも適当でした。

▶吹きぬけの手すりを使って練習

もう一つの条件は教師や大人の目が届くことです。一輪車は少しくらい練習したからと言って簡単に乗れるわけではありません。かなり長い間、ぐらぐらとバランスもとれず苦労しているのです。練習する場所がクラスの目の前で、職員室のそばであったことが幸いしていました。友だちや先生がしょっしゅう見てくれているし、職員室の園長や主任、給食のおばさん、みんなが通りかかる度に「がんばっているね」「もうすこしね」「上手に乗れるようになったのね」と声をかけたり、手を貸したりすることが励みになっていたようです。

友だち同士競い合い励ましあうことがエネルギーを呼び、いつでも誰かが練習していました。これが、もしいくら手すりがあり、車を止める壁があったとしても、誰からも見えない外などに置いてあったら、とても粘り強く練習しつづけることはむずかしかったと思います。

その後私は他の園に異動し、一輪車ができないも

のかとまわりを見回すのですが、適当なつかまる手すりもないし、大きなガラス戸があったり、職員の目がとどく安全な広場もないのです。園舎の構造や設備によって幼児に経験させられる遊びの種類は制限されるのです。

4　自己主張できること

おしまいに環境にかかわる幼児の側に目を転じましょう。

年間を通してかなりの幼児が乗れるようになりましたが、男児はほんの少しで、大半は女児です。一輪車を初めに上達する幼児を見ていると、運動神経の良い幼児とは限らないのです。むしろ「貸して」「つぎ、わたし」と自己主張して、一輪車を回数多く確保して練習できる幼児であることがわかりました。男児は一見強そうにふるまっていますが、実質的に自己を主張し、強引に物を確保しているのは、女児なのかもしれません。

保育の場は生存競争の世界で、環境に主体的にかかわるということがいわれますが、教師はよほど注意深く幼児を見ていないと、気の弱い幼児はやりたい経験もできずに、くやしい思いや、割り切れない思いをたくさんしているかもしれないのです。

＊

一輪車も始める時には始動エネルギーとしてかなり力がかかりましたが、二階の年長児が一輪車に乗っているのをうらやましく、尊敬をこめて見ていた年少児は年長になるとすぐに一輪車にとびついて練習するようになり、年長児の当たり前の遊びの一つに定着しました。一人遊びのように見える一輪車も仲間の励ましや、譲り合い、取り合いのけんか、友だちが乗れるようになったことを共に喜ぶ等、たくさんの心の経験をさせてくれました。

（茨城県公立幼稚園）

特集〈緑蔭図書紹介〉

阪神大震災と大江健三郎講演「癒される者」

中村　弓子

いま私は地下鉄サリン事件の主謀者たちに対して二重の意味で憤りを感じている。

もちろんまず第一には、この事件がもたらした直接的被害ゆえであるが、第二には、この事件が、それに先立った阪神大震災が私たち日本人にもたらした「良きもの」から注意をそらし相殺しようとしているからである。

大震災がもたらした「良きもの」というと一見パラドクシカルだが、大震災は確かに二つの大きな「良きもの」をもたらした。

第一の「良きもの」、それは日本の戦後五十年に対する反省である。日本が経済大国への邁進のうちでないがしろにしたものが、ちょうど戦後五十年目に起こった震災で露呈されて、そうした諸要素――市民の為の行政の不在、企業中心の都市計画（例えば神戸の市立病院は住宅地域から遠いポートピアに

移転されていて役に立たなかった)、物質至上主義の生活様式、など――に対する根本的反省の機会となった。

第二の「良きもの」、それは震災の大きな不幸を目の当たりにして日本人全体から溢れ出た、他者に対する優しさである。特に、一般的には他人に対して我関せずのエゴイストと思われていた若者たちのボランティア活動は思いがけない発見であった。

――私自身、教師として学年末の任務に忙殺されて身動きできないことを歯がゆく思いながら、自分の大学と非常勤の大学のクラスで、ボランティアの窓口のリストを配り、自分の学生時代のささやかなボランティア活動の経験に照らしても貴重な体験になると思うから是非参加を勧めると言ったとき、非常勤のクラスでは思いがけず拍手が起こった。柄にもないことを言う教師を冷やかしているのかと顔を上げて見ると、皆じつにいい顔をしている。私は思いがけない贈り物を貰ったような気持ちになった。そのうち何人がボランティアに行ったかはわからないが、ボランティアの若者たちは皆ああいう顔をしていたのだろうと思う。

ところで、大江健三郎の講演「癒される者」(岩波新書『あいまいな日本の私』所収)には、現代の、それも特に戦後五十年の日本人にとっての「病いと癒し」の問題が、政治的、内面的次元から総合的に実に見事に考察されている。

「日本、あるいは日本人が病んだ、病気をした、それをもっとも大きいスケールで見るならば、それはこの二十世紀において、どういう病気だったでしょうか? 私は、それが太平洋戦争にいたる日本の近代化においての帝国主義の膨張だったと思います。この日本と日本人が病んだいちばん大きい病気によって、アジア全域にわたって大きい死者が出たのみならず、国内でも広島と長崎で、一挙に死にあるいは傷ついた数十万の人間をはじめとして、数知れぬ犠牲者が出た。そのようにして日本・日本人の、

近代化の課程で担い込んだ大きい病気が顕在化したのでした。

そしていまも、病む者、病気をする者としての日本人を大きいメタファーで把えなおすことをめざすならば、広島、長崎の原爆被害を顧みるということは有効だと思います。そこには癒される者、病気を治されて二十一世紀へ向かう者、そういう存在としての日本・日本人を考えるための手がかりもまた含まれていると私は考えています。」（同書20－21ページ）

現代日本の政治的、内面的な「病い」に注目し、それを二十一世紀に向けて癒していかなければならない、という大江氏の提示する問題意識に対して、阪神大震災という思いがけない機会は、「戦後五十年に対する反省」という「病いの自覚」と、「優しさの溢出」という「癒し」の形で、ひとつの対応をひき出した、と私は思う。

阪神大震災は日本のど真ん中を引き裂いた傷であった。その傷は今まで隠れていた膿を露わにした。しかし同時に、その傷を日本人全体が自らの傷として引き受け癒そうとした。そこに、この震災がひとつの「幸いな災い」となったゆえんがあると思う。

七百二十余の作品を収めた**『悲傷と鎮魂――阪神大震災を詠む』**（朝日新聞社）の中には田谷鋭氏の「神のごと青年のボランティアありて僅か救はる震禍ののちを」の歌がある。こうして震災は傷であると同時に癒しとなった。

小田実の**『《殺すな》と《共生》――大震災とともに考える』**（岩波ジュニア新書）の近刊も予告されている。かつてベトナム戦争の時期に「ベ平連」の活動を通して日本の社会への平和のメッセージを送っていた小田氏が、大震災の機会に日本の社会にどのようなメッセージを送ってくれるのか期待される。

最後に、サリン事件で友人を失ったある方が私に

下さった手紙の中で引用されていた聖アウグスチヌスの言葉をご紹介しよう。それは単純な言葉のうちに、まさに今私たちが必要としているものを言い表わしていると思われるから。

「愛の空間をひろげる」(Dilatatur spatium charitatis)

(お茶の水女子大学)

『ナルニア国ものがたり』全七巻

C・S・ルイス作　岩波少年文庫

森上　史朗

最近、人間の発達に果たすイマジネーションの役割が注目されてきています。認知心理学者ハワード・ガードナーによると、子どもの中に既成の約束ごとや形式にそって、ものごとを考えるのが得意な〝パタナー〟と、イマジネーションの働きがさかんで、自分自身の独自の考えを構成しようとする傾向の強い〝ドラマティスト〟とがあるといいます。そして、今の学校教育や幼児教育はドラマティストを切り捨てて、パタナーをよりパタナーにしていく傾向が強いと批判しています。いわゆる〝早期教育〟といわれるものなどは、〝パタナー〟教育の典型ともいえるでしょう。

しかし、子どもであることの特性（＝子どもらしさ）は、子どもが自分の心を開放してイマジネーションの世界、ファンタジーの世界にひたれることだと思います。

私はルイスの『ナルニア国ものがたり』は、現存するファンタジーの作品の中で最高のものであり、これを超えるものは当分でないのではないかと思っています。

佐伯胖氏によると、子どもを理解することは、自分の中にある子どもらしさを発見することだ、といいます。すなわち、「こういう考え方、感じ方はついぞ忘れていた」、それを思い出すことが子ども理解だというのです。それには、大人である保育者も、『ナルニア国ものがたり』のようなファンタジーの作品をぜひ読んで欲しいと思うのです。

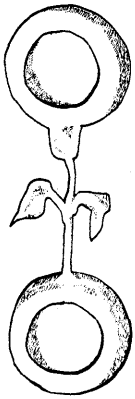
ところで「ナルニア国」へ往く道は、一巻ごとにみな違いますが、往った先の世界で起こるできごとは違っていていても、内面の世界ではひどく似通っていることに気づかされます。たとえば『カスピアン王子のつのぶえ』（二巻）では、学校の寄宿舎にもどる途中の四人の子どもたちが、乗り換え駅のホームのベンチに座っている時、不思議な魔法の力にひっぱられて、ナルニア国へ往ってまた駅のベンチに戻ってきます。往って還ってきた子どもたちにとって駅のベンチは「四人が思いこんでいたよりもはるかにすてきな景色に見えてきました。あのなつかしい鉄道のにおい、イギリスの空、それにこれから始まる新学期『やあ、すっかり思いきり遊んじゃったなあ』とピーターがいいました」

このようにファンタジーの国に旅してきた人たちはだれでも、その国の物語の主人公たちから、贈物をもらってきていることに気づきます。その贈物はこの世で贈られる物とは違って見たりふれたりはできないのですが、心の中に深く広がっていくものです。それは、ペペンシー家の四人のきょうだいにとっては、学校の寄宿舎に帰るつらい気持ちから立

ち直って、新学期に立ち向かっていくための勇気と力ということができるでしょう。そして、この物語の主人公たちといっしょに旅をした読者も、それぞれの心にからまった糸をときほぐして、内なる力をとりもどしていくに違いありません。

ミヒャエル・エンデは『はてしない物語』の中で、ファンタージエンの国に行けない人もいるし、行けるが行きっぱなしで帰ってこれない人もいる。しかし、行って帰ってくる人だけが、この現実の世界をゆたかにすることができる、といっています。このことからもわかるように、真のファンタジーの力とは、現実の困難をのり超える力そのもので、決して現実から遊離した絵そらごとではないのです。

この巻のあと、『朝びらき丸東の海へ』（三巻）『銀のいす』（四巻）『馬と少年』（五巻）『魔術師のおい』（六巻）に続き、『さいごの戦い』（七巻）でこのぼう大な『ナルニア国ものがたり』は幕を閉じます。



これら全巻を通じて語られていることは、人間は死に至るまで、心の内へ内へと一つ一つ皮をはいで、今の世界を脱皮していくというドラマであり、それがこれほどまでに具体的で壮大なスケールで語られているファンタジーの物語は他にはないように思われます。だからこそ、このファンタジーの大作を読んだ大人も子どもも、同じ質の力をそこからくみとることができるのだと思います。

（日本女子大学）

『心に残る言葉』
Words to Remember

小野寺　健　著　河出書房新社

村田　修子

ひとは多かれ少なかれそれぞれの年齢や生活している環境などからさまざまなことを感じながら生きている。そしてその経験を自らのものに加えながら成長していく。だからこの〝感じる〟ということが大切なことなのである。そのために、幼児の世界でも目標の一つとして「感性」という項目が表に出てきたものと思う。過ぎたるは何とやら、で余り鋭どすぎたり、他の人のせいにするような感じ方はどうかと思うが、感じることが何につけても必要なことはいうまでもない。

聞いた言葉に、またひとのするのを見たり、文字で書かれたものに感じることの大切さを私と同じように思っているから書かれた、と思われるこの本を興味深く見た。

外国の人の言った言葉が解説してあるため、片面に英語で書かれ、その下に解釈がある。そして反対

側の頁に著者の見解・意見・感想などが格調高く書かれている。

Nothing had really taken place in them until it was told to their mother.

D.H.Lawrence

彼らにとっては、母親に話すまでは、何事も起きたことにならないのだった。

D・H・ロレンス

D・H・ロレンス（1885－1930）
イギリスの小説家・詩人。予言者的な現代文明批判で知られる。『息子と恋人』『チャタレー夫人の恋人』など。

「幼い子どもにとっての母親というのは、こういう存在なのではないか」

「その日にあったことを母親に話すことによって、あったことがはじめて現実になる――。家に帰っても、そういう母親がいなければ、子どもは満足を得ることはできない。そのとき子どもは何を考えるだろうか。そのむなしさに耐えられる想像力や精神力など、まだ持っているはずがない」

と今の日本の現状に当てはめて、母と子どもの関係、その状態の中で育った子どもたちが大人になったときのことを案じている。

母と子どもの関係については、「仕方なくそうしているとか、女性の自立、という反論があるかもしれないが、そういう人にとっても先のことは分かりっこないものである」、と結んでいる。

一つの例として幼児に関係あるものをとり上げてみたが、アメリカの詩人、ロングフェローの「誰の人生にも雨は降る、暗く悲しい日がある」、ドロシー・ワーズワース（詩人ウイリアム・ワーズワースの妹）の「おお、神は冬を何という美しいものにして下さったのだろう。木々を裸にし、その姿形を見せて下さって」等々、横文字は苦手の私だけれど、これらの文章にはどれもリズムがあって快い。

今、最も私が心ひかれている言葉がある。

〝青春とは人間の一生のうちの或る時期をいうのではなく、心の様相をいう。優れた創造力・逞しい意志・燃ゆる情熱・卑きょうなことをしりぞける勇猛心・安易を振りすてる冒険心を持っていること。だから年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うときに初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失うときに精神はしぼむ。〟

何の本に書かれていたのか忘れてしまったのは年のせいとはいえ残念なことで、逆に出所を教えて頂きたいと思うのだが、この言葉は味わうと力が湧いてくるために、私の「心に残る言葉」としてここにのせさせて頂いた。

もう一つ、これも図書紹介とはならないことは承知の上で、これからものされるだろうと思われる、まだ見ぬ本を紹介したい。

それは、未曾有の震度を記録した阪神大震災を直接経験なさった、藤本義一氏の体験談である。毎日報じられるそのときの話は、時がたっても聞くたびに涙が自然に流れてしまう。

藤本氏は、丁度テレビの他の番組に出演しておられたが、その冒頭に地震のときの経験を話された。

・そういうときは足元がしっかりしていなければ、腰がくずれてしまう。だから必ず底の厚い（登山靴のような）靴をはくことが必要である。散乱した危険物によって怪我をする。そうすれば何の活動もできなくなってしまうからである。

・揺れていた時間は多分何十秒という短い時間であったと思うが、とても長く感じられた。その間空中を色々なものがヒューンととんできた。暗くて初めは何がとんでいるのか分からなかったが、本がたくさん置いてあったへやなので次第に見えてくると、厚い本が空中をとんできた。あとで見ると薄い本はざらざらと下に落ちていた。

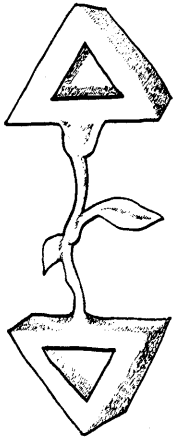
普段の常識とは全然かけ離れた事象が起こるのだ、ということを知った。

・一応落ち着いたので外に出た。外に出ると人はみな走っていた。そこへ犬の群れがやってきた。犬は整然と並び人間と反対の方向へ走って行った。人は危険な方向へ走り、犬は安全な方向へ進んで行ったそうである。動物の本能といおうか安全を感知する不思議なものを感じた、ということであった。

このような様々な実体験から感じられたことがまとめられて、私共の目に届くことを期待して、まだ見ぬ本を紹介する。

（洗足学園短期大学）

＊『心に残る言葉』の出所は解説によると、英字紙 Asahi Weekly に連載中の言葉のコラムより抽出したものです。



アダンの木陰に残光を観る
『田中一村作品集』

日本放送出版協会

本田　和子

田中一村が帰って来た。日曜美術館が、久しぶりにこの人を取り上げたことで、作品集が静かなブームを呼んでいるという。故郷を捨てたこの人は、亜熱帯の植物と黒潮の香に魅せられ、奄美の島に移り住んで、死に迎え取られるその日まで、名瀬郊外の陋屋で、ただ一人、画筆を握り続けたと伝えられる。

画題に選ばれたのは、樹木や花々、鳥や虫や魚たち。鋭く凝視して止まない彼の視力は、うっそうと茂り合う樹間の薄闇に、あるいは潮風にさらされる孤独なアダンの実に、飽くことなく注がれた。

南の島では、風までも呼吸を殺すのだろうか。海の上を雷音が鳴り渡ろうとも、波を稲妻が白く切り裂こうとも、林の中はただ静かで、熱い緑の精気だ

けが充満し、植物たちが音もなく枝を広げていくらしい。ビロウ樹やダチュラ、そしてコンロンカ、サンダンカなど、その名から既に「奄美」と響く植物たちは、それぞれ孤独に、それこそ「植物的」としか言いようもない無関心さで、勝手な方向へと繁殖し、枝を広げ、蔓を絡ませる。

結果として、彼の画面は、余白もなく、これら亜熱帯の草や樹木で埋め尽くされる。迷い込んだ蝶までもが、植物的精気に呪縛されたかのよう……。動くでもなく止まるでもなく、ゆるやかに、さながらに入眠状態の舞いを舞う。

密集した樹木の間から、それでも透けて見える海面の、波立ち揺れるその動きの、これもまた何と静泌なこと……。雷雲の下で海は小止みなく泡立ち波立ってはいるのだが、しかし、画家の絵筆は、その揺れ動く形のままに画面に封じ込めてしまう。彼の画筆が把えたのは、生命力、流動性、波動現象など、本来は動くことを指し示すことばたちが、その実、声もなく「静泌」であるということであるらしい。

そのゆえでもあろうか、彼の作品の前に立つとき、観る者たちは心を打たれるのでなく、心を吸われる。しかも、画面は、こうして吸い込んだ「心たち」とも無縁に、それぞれのありようで、植物たちを、あるいは虫や鳥たちを、勝手に繁茂させ、棲息させ続けている。だから、吸い込まれた「心たち」は、動きを忘れた蝶のように、どこやらに呼吸を殺して身を潜めるしかすべもなくなる。一村作品に対するとき、私ども観る者たちが、ただ、ことばもなく放心するのはこの所以である。否、より正確に、「心もなく、放心する」とこそ言うべきかも知れない。

中央の画壇とは無縁に死んだこの人を、初めてブラウン管に乗せたのは、地方局で地域の問題を追い続けていた一人のテレビ・ディレクターの熱意であったという。描き遺された一枚のデッサンに、目

を奪われたとのこと。NHKの「日曜美術館」で放映され、視聴者の反響に押されて展覧会も催されて、彼の作品には、つかの間の熱い視線が注がれたのだった。一九八五年、夏の終わりの出来事であったかと記憶している。そして、彼の名前は、慌ただしい一瞬のブームの後は、また、ひっそりと、そう、彼の作品さながら、そのまま静まり返ってしまったかと思われた。

しかし、久々のカムバックの報に、私は、作品集を手にする人が増えていることを喜んでいる。なぜなら、「視ること」、とりわけ「凝ること」という、視力だけによって生きることの栄光と悲惨を、こんなにも見事に表現してくれる世界は、そうざらにはないのだから。

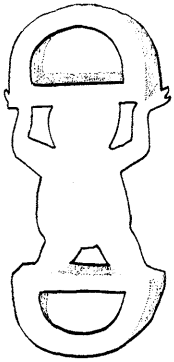
一村は、「部分」を「凝視する」人であった。「俯瞰する」という視力は、この人のものではない。部分への惜しみない凝視と、細部との濃密な交流。彼の画筆は、その所産として生気を帯びて動き出すのであろう。そのとき、俯瞰する視線にさらされない細部は、第三者的統一から逃れ、隣接しつつも独立した個体として画面に置き並べられる。固有の精気を充満させつつ、孤立して併存するそれぞれの「部分」は、決して求心的な「一枚の絵」という全体に回収されない。

画中に漂う不思議な静かさは、一村の感性がどの部分にも「同じ量だけ」注がれているからだとは、美術史家の小林忠氏の指摘であった。そして、氏は、江戸期の花鳥画家伊藤若冲との類縁性を指摘する。そう、確かに、俯瞰しないという点から言えば、そして、また、そのゆえの非全体性から見るなら、彼のまなざしは、若冲らに等しく近代以前のものかも知れない。

とすれば、「奄美の杜」などと仮りそめに付された画題を主題として受けとめようとするとき、観る者の視線が、奇妙な裏切りに翻弄されるのは、この前近代性に負うということになろうか。主題によっ

て把握すること、それ以外の観方を忘れた私どもの目の小賢しい近代性は、画面一杯に限りなく延び続けるガジュマルの根や、根元に咲く一輪のハマユウによって、さりげなく無化されてしまうのだから。

（聖学院大学）



子どもがすすめる本

湯沢　朱実

小さな家庭文庫の中で、子どもが三十冊の本を読むたびに「好きな本は？」と問いつづけてきた十三年の記録から、上位の何冊かをご紹介しましょう。

『ひとまねこざる』 H・A・レイ文・絵　岩波書店

このシリーズは、どれも字が多く絵本としては長いので、お母さん達には敬遠されがちです。けれども私は、この本を読んで、子ども達が退屈したという経験がありません。

アフリカからやってきた好奇心の塊のようなこざるのジョージがおこす騒動に、子どもは夢中になります。ジョージは痛い目にあっても、叱られて

も、そのたびに反省はしますが、すぐにまた次のいたずらにとりかかります。動物園から逃げだし、バスの屋根にとび乗って市内見物をし、レストランの調理場でスパゲッティだらけになり……。

新しい物を知りたい、触りたい、使ってみたいという強い好奇心と行動力は、まさに子どもそのものです。子どもにとって、ジョージは自分自身であり、英雄でもあるのでしょう。この本を好きな子をみると、いかにもという元気な子ばかりでなく、優等生タイプのおとなしい女の子もいるのが、おもしろいところです。

『11ぴきのねこふくろのなか』

馬場のぼる　こぐま社

このシリーズが子どもを魅了するのは、ねこたちの楽しそうな、のどかな表情です。表紙を見ると、もう中を開けずにいられません。

話は、とらねこ大将を先頭に、遠足に行く11ぴき。一面の花の原にさしかかると「はなをとるな」の立て札。ねこたちは「いっぱいあるから　ひとつぐらい　とってもいいさ」「うん　ひとつならだいじょうぶ」、なんだか私達の日頃の行動を写しているようで、どきっとさせられる所です。とらねこ大将の「だめっ」の制止も、「ひとつだけ」の声には勝てず、次のページをめくると、みんな頭に花をつけ、少々神妙な顔で歩いています。しかし反省はここまでで、後は「きけんはしをわたるな」「木にのぼるな」「ふくろにはいるな」の警告を次々無視して、読者をハラハラさせます。そして案の定、袋に入ったねこたちは、ウヒアハという化物につかまりますが、11ぴき力を合わせて、計略を練ってウヒアハをやっつけ、嬉しくてたまらない満足気な顔で意気ようようと山をおりてくるのです。この満足感の共有こそが、読者の醍醐味ではないでしょうか。

『ラチとらいおん』

マレーク・ベロニカ　ぶん・え　福音館

世界一弱い男の子のお話です。

「ラチは　せかいじゅうでいちばん　よわむしでした」。このはじめの言葉に、子どもがどれほど引きつけられるか、読むたびに驚かされます。ラチは、犬も暗やみも友達さえも恐いのです。それでもラチは、飛行士になりたいとの望みを持っています。いつも仲間はずれにされて泣いていたラチが、小さな赤いらいおんの助けを借りてどんどん力をつけ、とうとういじめっ子をやりこめるというお話です。

子ども達は、幼稚園に入る頃から、くりかえしくりかえしこの本を読んでもらって大きくなっていきます。子ども達のまじめな悩みを垣間見せてくれる一冊です。

『きょうはなんのひ？』

瀬田貞二作　林明子絵　福音館

私の文庫で、「好きな本」として一番多くの子に選ばれるのが、この本です。

朝、まみこは「おかあさん　きょうはなんのひだかしってるの？　しらないのしらないの　しらなきゃかいだんさんだんめ」と、謎のような言葉を残して、学校へ行ってしまいます。その後でお母さんが階段を見ると、三段目に次の指示を書いた手紙があって、またそれを見ると……。最後に郵便箱に、まみこからのプレゼントが届いています。それは、まみこが千代紙で作った十組の入れ子の箱。おしまいの小さな箱の中には、青と赤の実が宝石のように並んでいます。お父さんとお母さんの十度目の結婚記念日だったのです。そして両親から、まみこはかわいい子犬をもらいます。この本には、大冒険もどきどきするようなスリルもありません。しかし、平凡な家庭生活のだれもが望みうるしあわせがあるのです。四歳から五年生まで幅広い年齢の子ども達が、この本を好きと推しつづけています。この子ど

も達の願いのなんと慎ましいこと、それにくらべて、親の子どもへの期待はどうでしょうか？

文庫の子が好きと印をつける本のカードを見ていると、ペーシェンス・ストロングの「子供たち」という詩を思い出します。

〃……子供たちは、この悩みのおおい人の世に、自分から好んで生まれてきたのではありません…中略…。子供たちには、もてなしや金目のおもちゃよりも、愛情が必要です。愛と理解が　幸福な家庭とまじり気のない喜びが。にっこり笑いかける顔、思いやりのある声、平和とハーモニーが、幼い人びとに生きていく喜びと自信をあたえます。……〃

（ポケット文庫主宰）

『動物行動学入門』
『生涯発達の心理学　一巻』
『ライフサイクルの心理学　上・下』

水野　悌一

発達、子ども、心理といったキー・ワードに関連し、一九九三年以降に発刊され、入手容易なものに限って見た場合、あまり多くの図書は発見できない。次に掲げた三冊の図書は、内容的にも比較的新しく教養書としても適当ではないかと考え紹介を試みる。

『動物行動学入門』
スレーター、P・J・B著〈日高敏隆・百瀬浩・訳〉一九九四　同時代ライブラリー　岩波書店
一九〇〇円

P.J.B.Slater は聖アンドリュース大学自然史教授であり動物行動学者として活躍している。我々がヒトの子どもを観察する場合、しばしば動物行動学的な方法を用いるが、この図書は最近の動物行動学の入門書として適切なものと考える。スレーターは「一九五〇年以前に動物行動学者が作った理論で同じ対象を扱っている研究者に今でも役立つと見なされているものはほとんどないといってよいくらいだ」というが、この文章はフォン・フリッシュの理論は古いとしても、ローレンツやティンバーゲン的思考をともすると信奉してしまう者にとっては衝撃的でさえある。この図書を通して我々は改めて新しいとされる学問的理論の寿命の存在と、生体の研究には中枢神経系の構造・機能の新知識、環境からの影響を考慮することの必要性を教えられるであろう。しかし、「訳者あとがき」のなかで「小冊子ながら、盛り込まれている内容は高度なものでかつ新しい。……もっとも、私たちが著者の考えにすべて賛成というわけではなくて、はっきり反対であることもあったが……」と述べているように、どこに問題点があるのか調べてみるのも興味深い。いずれにしても初心者にいろいろな刺激を与えてくれる図書であることに間違いはない。

『生涯発達の心理学　一巻　認知・知能・知恵』
バルテス、P・Bら編〈東洋・柏木恵子・高橋恵子・監訳〉一九九三　新曜社　三六〇五円

この図書は木陰で一寸読むには内容が高度過ぎるかも知れない。しかし、国際的な視野で「生涯発達」を研究・理解しようとした場合、この程度の研究主題と内容が既に一九八〇年代に要求されていたことを知るうえでも貴重な文献となっている。学術研究のすべての領域で、新しい事実と将来の見通しが要求されることは当然であり、いたずらに枝葉末節の追究にとらわれるべきではないことは明らかである。Baltesらが編集した生涯発達関連の94章から15論文を訳者らが選択して三巻としたものの一巻である。一巻は認知、発達、二巻はパーソナリティの発達、三巻は家族・社会の影響のそれぞれ五論文から構成されている。このうち一巻の構成は、第一章　記憶の生涯にわたる変貌、第二章　成人の思考、第三章　成人の知能、第四章　知恵の生涯発達、第五章　成長と衰退の心理学となっている。

一巻一章では、加齢とともに記憶能力は下降するが、記憶内容は上昇すると述べていることは容易に納得できる。二章では成人の認知機能の繁雑性をすなおに受け入れることの必要性を述べていると思えた。三章では成人の知的能力は加齢によって減退するとはかぎらず時代差が大きいこと、社会からの離脱・家族の離散が知能減退を引きおこしやすいことなどは現代社会の一面を証明するものとして興味深い。五章は、発達を生涯にわたる過程としてとらえ、そのためには学際的研究が必要であることを強調していると理解した。

このように発達心理学の現代の文献で、学際的研究の必要性を述べていることは、我々にもここで再考を促すものと考えたい。いずれにせよ、「生涯発達の心理学」が真面目な研究者にとって啓示的な図書であることは間違いない。

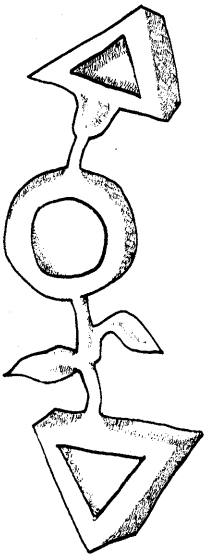
『ライフサイクルの心理学　上・下』

レビンソン、D著〈南博・訳〉一九九二　講談社学術文庫　九六〇円・八四〇円

まず、この図書は真面目な読者には好適な緑蔭図書としてお勧めしたい。四十人の成人男性の個人史を通して生涯発達心理学的、精神分析学的、社会学的などさまざまの立場から記録・解釈を行ったものである。Levinson,D.J.はエール大学で一九六六年から数年間にわたって学際的に数人の研究者とともに成人の個人史を取り、分析を行った。学問的なまとめは「生涯発達の心理学」を参照すべきだが、第一部の「成人の発達について」と第五部「おわりに」では成人の発達の概略がまとめられており、かなり参考になる。そのうちでも、「各発達段階の開始年齢や終了年齢に、比較的個人差がない」と述べているのは興味深い。しかし、これはあくまでアメリカ人男性の場合であり、現代日本人にあてはまるかどうかは今後の研究課題であろう。

いずれにせよ、我が国でも多数のこのような息の長い学際的研究成果が必要とされていることは、間違いのない事実である。

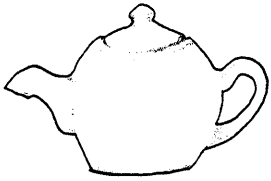
（お茶の水女子大学）



子どもたちへのまなざし（14）

聴いてもらう体験

松井　とし



十月の中旬に開かれた新規採用教員の研修会の場で、教師になって半年の若き保育者九人がそれぞれ自分がかかえている悩みや、保育への思いを語った。聞き手は「聞くこと」の専門家、カウンセラーのN先生。

先生は穏やかに「～なのですね」と語りかけながら、まさに十四の心（聴は耳ヘンに十四心）をもって耳を傾け、一人ひとりの話をじっくりを聞いて下さり、次第にグループ全体に和やかな雰囲気が満ちていった。

後日、参加者からは次のような感想が寄せられた。

『カウンセラーの先生に話を聞いていただいていると、なにかとても不思議な力で自分の頭の中の混乱していたものがどんどん引き出されていくようで怖ささえ感じました』

『他の人の話を聞いて、同じようなことで悩んでいるのだな、と感じホッとしました』

『N先生の話の聞き方、話し方から人に対する接し方、言動について自分を見つめ直す機会になりました。普段の生活の端々で子ども達を傷つけてしまう言動をしているかも知れないと思い、自分を客観視する目を持とうと思いました』

『強く感じたことは、聞き手のN先生が一人一人の話を決して否定されないということでした。一緒に考えていきましょう、という親身な姿勢が聞いている者にも伝わってきました』

『子ども達一人ひとりのありのままの姿を受け入れて接することができるように努力していきたいと思います』

『自分の悩みを人に伝えることで自分の中でも整理できました。先生が批判や判断をしたりせず、すべてを受けとめて下さったので安心して話すことができ、自然と解決の糸口がつかめたように思います』

N先生と話し手のやりとりを共感的に聞くことによって、自身の課題解決の糸口を見いだしていること、また自分の悩みや課題を聴いてもらうことによって癒される体験をきちんと位置づけ、保育者としての自分のあり方にまで考え及んでいること等、参加者一人ひとりの貴重な気づきに心を動かされた。

（元・幼稚園教諭）

親子発達とノート法

岡村　佳子

はじめに

私達の日常生活は、朝起きてから夜寝るまで、文化に守られて進められると同時に、一家の中心をなす人（例えば、母親とか主婦）が生活のリズムを体で実践していくことで成りたっているともいえよう。文化には、洗面、朝食、排泄、着替え、出社や登校といった一連のスケジュールが含まれている。スケジュール通りに行くこともあれば、スケジュールの部分がとばされたりすることもある。

子供達は、生まれるとしばらくは病院にいるが、退院するとすぐさま、この文化や母親の生活実践の中に組み込まれていくようである。そして子供の発達は、この文化と母親の生活実践の中で生じてくるともいえる。今まで、子供自体の発達は、基本的なものとして、言いかえれば自生的なものとして考えられてきたように思われる。種をまけば必ず芽を出し、自ずと発育し、実を結ぶといった考えである。ところが最近になって、今まであたり前であるとされていた文化や生活実践が、個性化という新しい文化の流れの中で変化してきているようである。そして以前とちがった母親や主婦像が生まれつつあ

る。そして子供達もその影響をうけて新しい個人が育ちつつあるともいえよう。

ノート法

もともとノート法は、発達の遅れを持つ子供の母子の生活改善を目標として、発達相談の中に取りこまれたものである。発達の遅れを一つの個性として考えてみると、集団の文化に規定された生活実践では、適応が困難であることは、誰にも明白であろう。とするとその個性に合致した生活実践を、母親が日常生活の中で創意工夫していくことが望まれる。その際、子供側の条件と母親側の条件を、比較的客観的に記録することがまず第一に必要とされてくる。

日常生活の中での、睡眠時間、寝つきや目ざめの良し悪し、食事の時間や内容、食事態度や食欲などは子供側の条件として書き出される。一方母親側の条件は、体調の良し悪し（特に、生理のリズム）、家族関係の良し悪し、お天気などがあげられる。これらは客観的条件として比較的記録をとりやすいものである。

さてもう少し精神的なものとして、主観的内容をあげて書き出すこともできる。これらは、母親からみた子供の行動観察（例えば、遊んでて楽しそうだったなど）や母親の悩み（例えば、障子を破るのでこまる。悪い子だ）、取り越し苦労（例えば、子供が将来どんな悪い子になるか心配だといったことなど）などがあげられる。

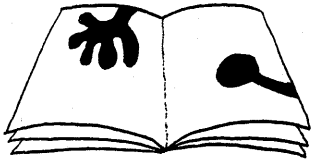
一般にノート法は、最初客観的条件の書き出しから取りくまれる。そして次の段階では主観的内容を書き出すようにしていく。以上の経験を経て母親達は、自分と個性的な自分の子との間に無理のない自然なやりとりができるようになっていくようなのである。

発達相談の場で、「○○してみたらどうですか」という形で与えられる上から下への指導助言は、母子の生活には不自然さをもたらすこともあるので、母親達は生活実践を拒むことも多いようである。ところが、自由度のあるノート法は、自らで自らの実践を創り出すことができるので、比較的気楽にうけ入れられるようである。ま

た彼女達の創意工夫による生活実践は、目にみえて良い効果が出てくるので、継続されやすいようである。そしてまた、記録によって身についた生活実践での創意工夫は、ノートを頼らずとも身についてくるようになってくるので、ノートをつけなくてもよい状態がやってくるようである。ところが母子関係が、あらたな段階でぎこちなくなってくると、また、ノート法を復活することになる。そんなようなプロセスで母親達は成長して、発達していく。一方、子供も個性をうけ入れられることで、より多面的な発達へと動機づけられていくようである。

ノート法の一般的活用法

子育てに悩む母親、もしくは育児や保育関係者、あるいは子育てに対する自信がゆらぐ人達にとってノート法は、効用を持つことが推測される。特に、子供が、最も個性化していく二つの時期、第一反抗期（三歳前後にみられる自我獲得の時期）、第二反抗期（十二～三歳前後の思春期）などに、ノートをつけてみることで母子とも



に楽になれるのではないかと思われる。そして二人を含む家族の中の緊張緩和にも役立つように思われる。そして、書くことによって生活を見なおし、自分の考えによって新しい生活環境を整えていくことで母親の人格発達が、自然発生してくるのである。

〈事例一〉

参考に、まず比較的、客観的に子供側の条件を書き出すことで成功した事例をあげてみる（表1）。この事例は、子供が牛乳ばかり飲んで食事を食べてくれないという悩みを持つ母親の場合である。幼稚園の年中の男児である。母親は何とか食べてもらおうと、熱心に料理を作るのだが、なかなか食べようとしないということであ

表1　事例一のノートの抜粋

日付		朝食		昼食		夕食	遊んだ友達	活動内容
9/19(月)	△	うずらの玉子から揚げおにぎり	×	パン給食	◎	野菜イタメしらすごはん		午後―サッカー教室
9/20(火)	△	ヨーグルト	×	おべんとう	○	メンチカツカレー冷奴	りょうくんの家へ行く	午後―ほとんど家の中でおもちゃ、ファミコンなど
9/29(木)	○	ハムエッグごはん	?	給食	○	キョウザごはん冷奴	すみちゃん(2年生)来る	台風が来るので、近所の小学生の女の子が遊びに来てレゴで遊ぶ
9/30(金)	○	のり巻ごはん	×	おべんとう(遠足)	○	ヒレカツみそ汁ごはんみかん	としくん こうくん 来る	午後―家の中で宇宙けいさつごっこ 外で探検ごっこ

る。こういった場合、母子関係が緊張をはらんでしまうことが、悪循環をくり返す原因になってしまうことが多い。そしてその悪循環を解きほぐすために、ノート法が活用された。

このノートでは、まず子供が、実際に何を食べたかを書き出してみることから始まっている。そして、よく食べた時は丸印、まあまあ食べた時（口の中へ母親が運んであげて食べさせた時）は三角印、どんなにしても食べない時はバツ印をつけることにしている。また一日の活動量と食事が関係するので、それについても客観的に記録している。具体的には、外出や、屋内での遊び、戸外での遊び、友人の名前（活発な子かおとなしい子かで、活動量が変化するため）なども記録していく。約一か月間の記録の一部が表1に示してある。一か月を経過した頃、母親は自分の悩みが解消したと報告している。また、子供の生活を全体的にとらえられるようになっており、ごちそうを作って食べさせることだけが母親の愛情だと信じこんでいたことが、悩みの原因であったことに

表2　事例二のノート

<table>
<tr><th>段階</th><th>期　間</th><th>例</th></tr>
<tr><td>(一)</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(二)</td><td>H5.9.11
～9.30

20日間</td><td>9.11　病院（言語室）で10分おんぶ、家で5分だっこ、夜5分だっこ
9.12　おんぶ5分、15分だっこ
⋮
9.14　昼寝15分、おんぶ10分
⋮
9.30　駐車場から病院までだっこ。半分泣いていた。
AM. 9：45～9：55
病院の中で待ち時間120分、指を吸っていた。途中から寝た。AM.10：00～12：00</td></tr>
<tr><td>(三)</td><td>H5.10.1
～H6.4.30

約7か月</td><td>
<table>
<tr><th>10／1</th><th></th><th>あさ</th><th>ひる</th><th>よる</th></tr>
<tr><td>おんぶ5分</td><td>11:20～12:30の間で</td><td>指すって</td><td>ごはん
1／2杯</td><td>パン</td><td>ごはん</td></tr>
<tr><td>おんぶ5分</td><td>16:40～16:45</td><td>〃</td><td>みそ汁
1／2杯</td><td>アイス</td><td>焼肉</td></tr>
<tr><td>昼寝20分</td><td>14:00～16:30の間で</td><td>〃</td><td>牛乳</td><td>かき</td><td>牛乳</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>茶わんむし
ジュース1杯</td><td>牛乳</td><td>梨</td></tr>
</table>
おんぶは最初喜んで背中にくるが、すぐおりてしまうので数分を何回かおんぶするようになってしまう。
だっこしたりひざにだっこすると、弟が同じようにひざに入ってきたりよりかかってくるので、本児が逃げていってしまうのでなかなか無理。おんぶしてても弟がずっと見ている（不思議そうに）。</td></tr>
<tr><td>(四)</td><td></td><td>記　録　せ　ず</td></tr>
<tr><td>(五)</td><td></td><td></td></tr>
</table>

気づき始めている。

〈事例二〉

この事例は、最初子供と母親との客観的条件としてのふれあい時間の書き出しから始められる。そして次に食事の内容が客観的に書き出される。そして次の段階で、母親の主観（悩み）が書き出されていく。三歳の男児と母親のしっくりした感じの関係がもてないという悩みの解消にノート法が使われた事例である。この事例ではノートのつけ方を、第一段階から第五段階へと時間の流れを追って変化させていっている。

ここで、発展段階の第三段階のつけ方をよくながめてみることにする。すると私達の生活の中でよく利用されている家計簿に似てはいないだろうか。上の方に書かれているのは、金銭の出入りのらんに相当するもので客観的記入である。下のらんは日記のように自分の主観を書くらんに相当しているように思われる。そしてこのような書き方によって、母親は、自分の主観と子供の客観的記録を常に対照させて考えたりながめたりする習慣が身についていくようである。こういったふうにして生活を毎日きちんと意識して暮らしていくうちに、どのようにして子供の個性をうけ入れるか。どこで自分の考えを子供に伝えるかといったことが、自ずと身についていくようである。

〈事例三〉（ノートの抜粋）

四月十一日（日）　くもりのち雨

今日はくもっていて肌寒い一日でした。夫は、朝九時に出かけて、夜九時頃に帰って来ました。寒い日だったけど車がないので、（私は）オートバイをかりてそれでいったものだから、もう寒くて寒くて仕方ありませんでした。ぶるぶるとっていう感じです。（夫は）電話もしないで、本当に勝手なものです。

Aちゃんは、色々と話す言葉がふえました。スミマセン、歌、など、すごく早口な時もあります。

（　）は筆者註

＊

この事例は、自分の悩みを解消するために一冊のノートをつけると同時に、子供との関係を客観的に書き出すノートを別にとるという方式である。ここで紹介したのは、前者の一部で、主に自分の悩みの分析用に使われているものである。お天気とか、夫の生活態度、姑の助言などが自分の心にどうとらえられたかなどが主に書かれている。そして、それと切り離した形で、母と子の日常生活を客観的に切り出して記録している。このようなプロセスには、母親の社会や生活に対する不安やイライラが子供の日常生活に悪影響を与えないよう工夫されていることがうかがえるのである。

おわりに

日常生活の無意識の流れの中で、悩みは発生している。そこで、記録をとるということをひらがなと丸や三角やバツぐらいのかんたんな方法からとりかかり、段々と、より複雑な内容の書き出しへと進んでいくことで、無意識は記号化され、象徴化されてくるのである。そしてこのような整理の中で、自ら答えを発見し、それを生活実践していくのである。自分が書いて自分が読むという現象の中には、主体となる自己と他者の立場にたってながめたりみつめたりする自分が分かれている。これは自我発達の筋道をたどるものでもある。母親を一人の大人として完全な母親としてみるのでなく、柔軟な自我発達を自ら求めていく人としてとらえるとよいかと思う。ノート法はそんな素晴らしい母親像を生み出してくれているのではなかろうか。

（浜松短期大学非常勤講師・聖隷浜松病院言語訓練室非常勤相談員）

ある日の育児日記から (56)

佐藤　和代

年長組になった圭が、初めておともだちの家に泊まってきました。

いまだに添い寝してやらないと眠れない子なのに大丈夫かな？　でも「お願い、お願い」とせがむし、Nちゃんのお母さんも「夜泣いたら、車で送っていくから」と言ってくれたのでOKしました。

考えてみれば、この日を待っていたのよね。圭は、毎日毎日、私とぴったりくっついて寝ていたんだから。私だってたまにはのびのび眠りたい。なんたって、ほとんど六年ぶりよ。といっても、有がいるのであまり変わらなかったりして。ま、片手があいただけでもいつもよりましかな。Nちゃんのお母さんはいつもの倍大変かしら。お世話かけます、感謝感謝。

さて、翌朝Nちゃんのお母さんにお礼を言おうと電話を…と思ったら、いきなり圭が出た。

「あ、お母さん。きのう？　ちゃんと寝たよ。Nちゃんち、お母さんもお父さんもまだ寝てるの。だから、Nちゃんと力をあわせて、朝ごはん作って食べた。Mちゃん（妹）にも、食べさせたんだよ。お母さんたち起こさないように、三人で静かに遊んでるよ」。

…あ、あんまり、お世話もかけなかったみたいね。家でもそれくらい、お姉ちゃんでいてくれないかなあ。

これが圭と有の眠り方！

子どもと共にいて

斎藤　美和

〈朝の子ども達〉

「せんせい、これあげる！」

「せんせい、いっぱいでおちちゃうよ！！」

朝の玄関は、いつでも賑やかです。

お母さんと手をつないで、徒歩で登園する子ども達は、季節の移り変わりを、園の行き帰りの道で肌で感じながら、その時々のお土産を手にしてやって来ます。

春のお土産は、桜の花びらやたんぽぽ、梅雨の頃は、かたつむりの赤ちゃん、秋には、きれいに色づいた葉っぱや調（つきのみや）神社のくさーい銀杏だったりします。そして何と言っても多いのは、椎の実とどんぐりです。両手に持ちきれず、ズボンのポケットをいっぱいにしてくる子もいます。

「せんせい、あのね、M子ね、英語ならってんだよ」

「わあー、すごい。おはようは、何て言ったらいいの？」

「ハローだよ」

M子は、靴を履き替えながら、他にも知っている「英語」を得意になってご披露してくれました。

R男は、お母さんの背中に隠れるようにしてやって来

ます。

「Rちゃん、見つけた！」

「ぼくはね、つかれちゃったからね、ねむたいからね、ようちえんには、いかないの」

「そうか、じゃあ、積み木でベッドでもつくろうか？それとも椅子に座って寝ようか」

そう言って、玄関で靴の履き替えを手伝って、庭の見える所まで手をつないで行くと、

「あのね、そとであそんだら、ねむいのがなおるかもしれないから」

「あらー、良かったわね。H先生がお部屋で待っていて下さるから、お話しして外に行ってね」

また、ある時は、大きい組のS君が、泣きべそで遅れてやって来ました。

「おはよう！　どうしたのかな？」

「あのね、うんとね、おかあさんにね……」

「おこられちゃったのかな？」

「うん」

「どうしておこられちゃったのかな？　寝坊でもしたのかな」

「ううん、あのね、さんすうのね、もんだいができなくってね、おこったの」

どうやら朝から家で『お勉強』をしてきた様子です。やれやれ、困ったな、勉強は学校に行ってからで十分なのに、幼稚園の子どもにとっての勉強は遊びだっていつも話しているのになーと内心思いつつ、泣きべそのS君を部屋まで連れていきました。

クラスを持たない私に、玄関で見せてくれる子ども達の顔は、部屋で担任に見せる顔とはちょっと違っているようです。朝の家でのわだかまりを、玄関での私との出会いの中で吹っ切って、部屋に行く子もいます。昨日の楽しかったことを、担任よりも先に共有できたりもします。

一方、入園当初泣いていて私がずっと抱いて過ごした子も、いつしかクラスの先生が大好きになっていきます

から、クラスを持たないでいる私は、何となく淋しい思いを持ったこともあります。

しかし、担任には見せないようなこんな朝の子ども達の顔とたくさん出会っているうちに、心のもやもやが少しずつ晴れてきました。

かつては幼稚園児だった我が子二人が中学生となった今では、「お母さん先生」と言うには少し年を食ってしまったのですが、若い「お姉さん先生」とは違った立場で子ども達と生活したいと思うのです。

〈椎の実やさんへどうぞ〉

「せんせい、きょうもしいのみやさんしたい！」

と、N子ちゃんは、玄関に入るなり私に話してきました。Aちゃん、Mちゃんも両手にいっぱいの椎の実を抱えて登園してきました。

この子達は、その前々日に遊戯室の裏で、「生のまま」の椎の実を洗いもせずに皮をむいて食べていました。

「あのね、鍋に入れてがらがらって炒って食べるともっとおいしいのよ」

「あっ、しってる、ずっとまえやまさん（年長組）がやってたよね」

そこで年長組の担任に話してから、私は子ども達と「椎の実やさん」の準備を始めました。

まず、電熱器と片手鍋を用意し、子ども達が廊下に運んできた机の上にセットし、よーく洗った椎の実を一握り程鍋の中に入れます。そして殻にちょっとひびが入るまでしゃもじでがらがらと炒るのです。やがて、その様子を見た小さい年少の池組さん達が早速机の周りに集まってきました。

まねをして拾いに行った池組さんもいましたが、せっかく拾ってきたのにそれは残念ながら「どんぐり」でした。

「さきがね、とんがっているのをひろってくるんだよ」

年長のお姉さんが一生懸命教えてあげました。

一方、「椎の実やさん」は、大忙しで炒った「椎の

実」を、五個ずつお皿に入れて、並んだお客さんに渡します。お客さんは、日の当たった廊下に座り込んで、おいしそうに「椎の実」を食べていました。

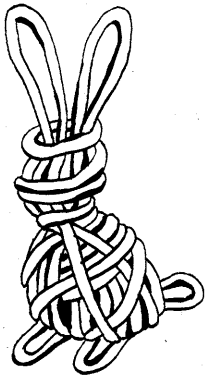
忙しかったけれど、おうちでは普段させてもらえないようなことをたっぷりとできて、よほど嬉しかったのでしょう。次の日、今日も昨日の続きをするんだと弾んだ気持ちでやって来て、朝の玄関で私に話してくれたのでした。

「せんせい、わたしもはいったんだよ」

新しいメンバーもお店の人に加わり、上手に役割を分担し合って、時々「アチッ！」と言いながら、本当に楽しそうに「椎の実」を炒っていました。

毎年のように繰り広げられる「椎の実やさん」の光景です。「椎の実」を拾っていると、落ち葉の中に珍しい虫を見つけたりします。

「じゃあね、Yくんをよんできて！　むしのことよくしっているから」



生活の中で、友達のことを理解していく子ども達です。

何でもない他愛のないような遊びが、幼稚園の中では毎日のように繰り返されています。その一つ一つを、これはこんな意味があり子どもはこんなふうに成長しました、などと大層な教育論を展開するつもりは毛頭ありません。

子ども達が、毎日すごーく楽しいと心から思えるような生活ができれば、それだけで幼稚園としての意味があるのではないかと、「椎の実やさん」に精出して生き生

き輝いたNちゃんの顔を見ながら、私はつくづく考えたのでした。

〈とかげのしっぽ〉

毎年必ず一人や二人はいる「虫大好き」の男の子。そんな年長の男の子の間で、「とかげ」を捕まえるのがはやっていました。

するするっと身をかわして逃げる「とかげ」を素手で実に見事に捕まえるのです。

「かわいいよ！」とU男君は、「とかげ」の頭を、優しく撫でています。

「せんせいもさわってごらんよ」と何度となく勧められましたが、青虫やみみずは触れても「とかげ」だけは苦手の私です。

水の中を泳がせてみたり、桑の実をくわえさせてみたり、「とかげ」はまさに生きたおもちゃです。

ある時は、さっと逃げる「とかげ」を素早く押さえ込んだのですが、しっぽのところで切れてしまいました。

「スゲーヨ、ちがでてるよ」

本当は、無傷で捕まえたいのですが、残念ながら胴体だけになってしまった「とかげ」としっぽを手にして、それはもう得意げに小さい池組さんに獲物を見せて回ります。

捕まえられた「とかげ」は、餌と共に、放課後の男の子の家々を順番に回ったりもしました。

こんなに捕まえても、次から次へと新しい「とかげ」達は、懲りずに幼稚園の庭に出没するのです。

もう何匹の「とかげ」達が家に持ち帰られたのでしょうか、果たして「とかげ」達は生きているのでしょうか？

そんな矢先、朝日新聞の「ひととき」の欄に「母子してとかげを飼っています」と言う記事が載っていました。生きた餌しか食べないので、母子で一生懸命ハエを捕まえて食べさせているとか。そのお母さんも一年前は「とかげ」などは気味悪くて触れなかったけれど、二年目には子どもと共に夢中になっているというものでし

た。

このお母さんのようには、私にはできないとは思いますが、一目「とかげ」を見ただけで、「可哀想だから、おうちに返してあげましょうね」と捨ててしまいたくはないと思います。

おもちゃのようにいじくり回して結局は死なせてしまったとしても、そこから生あるものは必ず死ぬのだということを知り、その中でこそ生き物への愛情を実感として学んでいくのではないかと思うのです。

毎日子どもと生活していて、子どもっておもしろいことを考え出すんだなと気付くことがあります。何でもない場面ーともすると見逃してしまいそうで単純で他愛のない遊びの中で、夢中になって何かになり切って遊ぶ子どもがいます。

このようなひと時は、本当に楽しく幸せな時であり、幼稚園時代だからこそ味わうことができるものでしょう。

にもかかわらず、私は時として、この子はどうしていつも一人でいるのかしら、この子はもっとお友達に優しい口調で話せばいいのに、この子はいつもテレビの話ばかり、などと子ども達の困った所ばかり目について、どうしたらこの子は変わるのかしら、どうしたらこんなことが身に付くのかしら、とだけ考えてしまいます。

そんな時私は、子どもと同じ目線で同じように遊んでみます。すると、へー、子どもってこんなこと考えて遊んでいたんだと、子どもの心にほんの一瞬ですが触れることができます。

これからもゆったりした心で、担任とは違った目で子どもの心を見つめていきたいと思っている毎日です。

（埼玉県立浦和女子高校附属幼稚園）

編集後記

今月号から「幼児の教育」編集部に仲明子さんをお迎えします。仲さんは、本誌91巻で、〝遊びのスクランブル交差点〟を連載、ご記憶の方も多いかと思います。教職や子育ての心理相談など、豊富な経験を生かした幅広い活躍が期待されます。どうぞよろしくお願いいたします。

本誌編集に携わって六年半が経ちました。幼稚園の年中組だった息子はもう六年生。娘は高校生になりました。子どもの成長と平行して、本誌編集に関わらせていただき、著者や読者の方々と一緒に、目の前の子どもの問題を考えることができたのは、何よりの幸せと思っています。

編集の仕事は、書き手と読み手の心をつなぐ、とても繊細な仕事といえます。全くの素人の私には少し荷が重すぎたのですが、多くの方々に支えられ、はげまされ、充実した六年半を過ごさせていただきました。長い間のご支援ありがとうございました。

（K）

＊

編集の「いろは」から教わりながら、やっとひと月がたったところです。この十年間、「母親」という保育者として、毎月この雑誌に励まされてきた私は、このご縁をとてもうれしく思っています。また、すでに紙面を通して知っていた方々に、直にお目にかかることができたり、お話しできることは、今まで読者であった私には新鮮な体験です。どうぞよろしくお願いいたします。（A）

幼児の教育

第九十四巻　第八号

（一九九五年八月号）

定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成七年八月一日

編集兼発行人　田代和美

発行所　日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所　図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―一二―一

発売所　株式会社　フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六―一四―九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

おおきなしぜん ちいさなしぜん

①てんとうむし
②ちょう
③むしのたまご
④みつばち
⑤とんぼ
⑥ようちゅう
⑦おとしぶみ
⑧かまきり
⑨あしもとのいきもの
⑩かぶとむしのなかま

私たちをとりまく自然界には、どんな虫たちが生息しているのでしょうか。子どもたちの大好きな昆虫の仲間のそれぞれの特徴や生態、卵から成虫になるまでの過程をわかりやすく、イラストやカラー写真で紹介します。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）

①あぶら
②たまご
③いし
④ふじさん
⑤ほね
⑥みず
⑦いろ
⑧かび
⑨かみ
⑩しゃぼんだま

私たちが日常、何気なく見たり、さわったりしているもの、これらのものたちには、どんな性質や特徴が備わり、私たち人間にとってどのように有用な役割を担っているのでしょうか。わかりやすく精緻なイラストやカラー写真で構成しました。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

いきいき保育資料⑨

続・ザ・ペープサート

ザ・ペープサートの続刊。昔話と子どもたちに受ける新創作の四点構成、劇の演じ方、人形の作り方などの解説つき。演じる先生と子どもたちが対話しながら楽しめます。

①「へっこき嫁さま」
②「チッチとプイの魔法はね」
③「いじわるゴリラをやっつけろ」
④「きつねがいっぴき」

阿部　恵・著　B５変型判・80頁・定価2,500円（本体2,427円）

いきいき保育資料

2 ザ・パネルシアター① 阿部　恵・著
①「三枚のおふだ」　②「ころころまてまて」　③「おばけのいつつごちゃん」

4 ザ・パネルシアター② 阿部　恵・著
①「ももたろう」　②「おおきくなったらね」　③「ハッピーバースデーお月さま」

6 ザ・パネルシアター③ 阿部　恵・著
①「ヒツジかいとオオカミ」　②「たまごがころんあれあれ／」　③「あいうえ王子」

1 ザ・エプロンシアター① 中谷真弓・著
①「はらペコかいじゅう」　②「おふろにはいろう」　③「ねずみのすもう」

3 ザ・エプロンシアター② 中谷真弓・著
①「まるさんかくしかくなあに」　②「ウサギさんインフルエンザ」　③「大きなカブ」

5 ザ・エプロンシアター③ 中谷真弓・著
①「みんなねんね」　②「りんごの木」　③「せんたくしましょう」　④「どうぶついっぱい」

7 ザ・ペープサート 阿部　恵・著
①「おむすびころりん」　②「三つのねがいのたまてばこ」　③「パンやさんへおかいもの」　④「だいすきカレーの誕生会」

9 続・ザ・ペープサート 阿部　恵・著
①「へっこき嫁さま」　②「チッチとプイの魔法はね」　③「いじわるゴリラをやっつけろ」　④「きつねがいっぴき」

8 ザ・テーブルシアター 長縄　泰子・都丸つや子／共著
①「ひかりちゃんのおにわ」　②「てぶくろが化けたとさ」　③「ブレーメンの音楽隊」　④「さるとかにのおはなし」

B５変型判・各80頁・各定価2,500円（本体2,427円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。